連載 戦時下日本の国策紙芝居研究報告

戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

—「登場人物編」その４

—近代（明治・大正）前編—

原田　広（非文字資料研究センター　研究協力者）

本号より、戦時下紙芝居の登場人物から、「近代（明治・大正）」に生き活躍した人物として大村益次郎、西郷隆盛、小村寿太郎、日清戦争の殉難者、日露戦争の軍神、野口英世を取り上げる。ここに挙げた登場人物は、戦時下紙芝居に携わった中心的創作者の年齢をおよそ〈1940 年に 25～35 歳〉（1905～1915 年生）と想定すれば[注1]、その祖父母（概ね 1855～1865 年生：維新初期に育ち日清戦争に直面した可能性がある世代）、あるいは両親（同 1880～1890 年生：明治憲法発布・教育勅語渙発前後に生まれ日露戦争期に青少年時代を過ごした世代）の生きた記憶に刻まれてきたであろう人物である。言い換えれば、戦時下紙芝居の主要創作者にとって、父母・祖父母から聞き親しんだ炉辺“ものがたり”とともにあり、額縁に収まった歴史的人物というには依然として生々しい体温を伝える人物であったということになるだろう。本稿では、そのような人物たちを戦時下紙芝居に呼び入れたとき彼ら登場人物が語るものは何か、あるいは何を語ることを託されていたか、そしてまた紙芝居そのものは如何なる挙動を始めるか、個々の作品紹介とともに明らかにしていきたい。以下、『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉誠出版、2018. 2）は『国策』と略し、その作品解題を一部引用させていただく。脚本の引用部はイタリックで表記する。

なお本稿「近代（明治・大正）」期は、下記のような目次で構成するが、誌面の都合で前・後編に分割し、1.～2.(1)(2) までを前編、2.(3) を後編として掲載させていただく。

1. 登場人物と作品：近代（明治・大正）
2. 登場人物「近代（明治・大正）」の特質
   (1) 大村益次郎：明治偉勲に事寄せる徴兵制
   (2) 西郷隆盛：人物描写の両義性
   (3) 日清・日露戦争の勝利：世界の強国へ、世界比肩の物語へ

1. 登場人物と作品：近代（明治・大正）

●大村益次郎　1824 年 5 月 30 日(文政 7 年 5 月 3 日)－1869 年 12 月 7 日（明治 2 年 11 月 5 日）

周防国（現在の山口県）生まれの兵学者。元の名字は村田、通称は蔵六。戊辰戦争において卓越した軍才で幕府軍を破り、明治政府の兵部省初代大輔となる。司馬遼太郎『花神』（新潮社、1972）を原作とした NHK の同名大河ドラマ（1977 年放送）の主人公にもなり、事実上の日本陸軍の創始者と見做されている。以下の戦時下紙芝居 2 作品も、陸軍建設の祖としての大村を描くものである。

大村益次郎：國民皆兵／郷田悳原作；鈴木景山脚色；西正世志繪畫．日本教育畫劇，1942. 11. 30

1869（明治 2）年 9 月京都にて、大村益次郎の兵制改革に反対する武士たちが大村の暗殺を計画。その実行計画には大村の幼馴染・新宮十蔵も加わっていた。新宮は暗殺決行日になって仲間たちに実行の猶予を願い、兵制改革を思いとどまるよう大村を説得する。しかし逆に大村の*「国民は皆兵なり」*という信念を聞き新宮は己の非に気付く。だがその時、大村暗殺が実行されてしまう。大村は右足の大ケガから敗血症を発症、右足を切断しなければ命が助からない状態となる。大村は天皇の許可がなければ切断せず*「兵部大輔としての身体髪膚これ皆神御一人に捧げ奉ったもの」*と国家の鉄則を守ることに固執する。ようやく許可が届き切断手術が行われたがすでに手遅れであった。新宮は大村の病床へ赴き許しを請い、大村はこれを許す。その時、大村のもとへ兵制改革が実行されるという報せが届く。大村は*「国民は、皆兵なり」*と叫び新宮や仲間たちに見守られるなか没する。郷田悳『国民皆兵』1941 年を原作とする（『国策』解題 p. 132／新垣）。

兵制の父 大村益次郎／大政翼賛會宣傳部作；中一彌画．翼贊紙芝居研究會，1942. 11. 30

ペリー来航などにより、長州で兵学塾を開いていた大村は早期の天皇親政による軍備の必要性を痛感していた。慶應 4（1868）年の上野戦争の際に政府軍の指揮官として彰義隊を追討。明治 2（1869）年には兵部大輔となり、軍隊の天皇親卒や廃藩、武士の佩刀禁止・断髪による国の結束を説いた。非難の声もあったが大村は兵制建設に邁進した。9 月京都で兵制改革反対派の襲撃にあい負傷した。療養中、大村は三条実美に兵制改革推進を求める手紙を送る。三条からの返事には大村の改革を実現するとあった。11 月大村は息を引き取った。三条が約束したとおり、明治 5 年に徴兵告諭が発布された。大村像は靖国神社前で戦争の完遂を見守っている。太平洋戦争緒戦の戦果に、国民皆兵の基礎を築いた大村益次

郎の先見の明があったことを顕彰する（『国策』解題 p. 134／小山）。



図1　『兵制の父　大村益次郎』

●西郷隆盛　1828 年 1 月 23 日(文政 10 年 12 月 7 日)－1877（明治 10）年 9 月 24 日

明治維新の指導者（軍人、政治家）。「安政の大獄」による尊王攘夷派への弾圧、鹿児島藩主島津斉彬の急死で失脚、僧・月照を伴い入水自殺を図るが救命。奄美大島・沖永良部島・徳之島に都合 5 年の流罪を経験する。帰命後、第 1 次長州征討から討幕へと転換し、木戸孝允と薩長連合を結ぶ。勝海舟と江戸城無血開城を実現し、王政復古のクーデターを成功。明治新政府内でも維新の諸改革を断行。明治 6 年征韓論に敗れ下野し、10 年郷里の私学校生徒に促されて挙兵するが、政府軍に敗死する。NHK 大河ドラマ「翔ぶが如く」（1990 年）「西郷どん」（2018 年）の主役となるなど国民的人気の高さを誇りながら、大村と異なり、戦時下紙芝居に西郷隆盛を主人公とした作品は存在しない。

臣民の道／小谷野半二繪畫；日本教育紙芝居協會脚本．日本教育畫劇，1941. 12. 26

1941 年 7 月に文部省教学局より刊行された同名タイトルの国策文書『臣民の道』の紙芝居版注釈書というべき作品。プロパガンダに「照れ」や「ためらい」などは無用であるという好例の作品であろう（『国策』解題 p. 83／富澤）。“天孫降臨”“八紘為宇”“一国一家”“その所（分）における皇運扶翼”と、『臣民の道』と同一行文に続けて、“尽忠報国の精神”を謳う場面で、愛犬を引く上野公園の銅像（絵画）の裏面（脚本）に、*「世の中には金も名も生命もいらぬという人間ほど始末に困るものはない、**西郷南洲翁**の言葉です」*と西郷の言葉が唐突に引用され、次ページ（⇒画面展開）で*「よく嘘つきは泥棒の始まりといいますが、自分だけ良ければいいという私心は不忠の始まりです。私心を去り尽忠報国の誠に生きるところに私共臣民の本領があります」*と受けている。この誤解を生みかねない行文配置の問題性については、本稿連載「用語編」その 8【国史】（『ニューズレター』No. 40、pp. 38～39）で記載したので繰り返さない。

學の泉：教育勅語解説／［斎藤弓弦画］．［權田藤三郎］，1943. 01. 23

実業家の権田藤三郎（権田伸銅所社長）が、おそらく私財を投じて出版、頒布したもの。権田伸銅所は黄銅棒を生産し、海軍の指定工場となっていたといわれる。画は日本画家の斎藤弓弦によるものと思われる。紙芝居というよりは（教育勅語の）絵解きと説明（『国策』解題 p. 147／森山）。西郷は「朋友相信し」の項に*「**西郷隆盛**と僧月照―明治維新の際に朝廷の為に盡した**西郷隆盛**（清水寺の僧月照の死後）同舟していた平野国臣等によって救われ、その身命を以て友誼を全うしようとした**西郷**の心事（しんじ）は永く友道の模範とすべきであります」*と、陽明学流の至誠の人物として描かれる。

物語愛國百人一首／納富康之脚本；佐東大朗子繪畫．日本教育畫劇，1943. 08. 20

日本文学報国会や情報局、大政翼賛会、東京日日新聞、大阪毎日新聞などが企画し 1942 年 11 月に発表された「愛国百人一首」に選考された和歌を挿話とともに紹介する作品（『国策』解題 p. 172／新垣）。*「(蛤御門の変に敗れ野村望東尼の山荘に身を隠した高杉晋作に望東尼が) お引合わせしたい方がございます、**薩摩の西郷さんです**」*と、望東尼の歌「*もののふの　やまと心を　より合せ　ただひとすじの　大綱にせよ*」に託して薩長の連合を持ち掛け、一方の雄・西郷の登場を暗示的に描いている。



図2　『學の泉：教育勅語解説』

●小村寿太郎　1855 年 10 月 26 日（安政 2 年 9 月 16 日）－1911（明治 44）年 11 月 26 日

外交官、政治家。父は飫肥藩士。藩校振徳堂で学び貢進生として大学南校に進む。明治 8 年に文部省第 1 回留学生に選ばれてハーバード大学に入学。帰国後、司法省に出仕、大審院判事を経て 21 年外務省翻訳局長。日清戦争では政務局長。その後、外務次官、駐米、駐露、駐清公使を歴任。34 年には第 1 次桂内閣の外相となり、日英同盟に調印。日露戦争後のポーツマス会議に全権と

して出席し、日露講和条約を締結した。

小村壽太郎／郷田憲原作；北島英作脚色；今泉博全繪畫．日本教育畫劇，1943．09．30

日露戦争講和のポーツマス条約締結に臨んだ小村寿太郎の物語。*「17億の軍費、5万の英霊」*を費やしながら賠償金を取れなかった政府への世論の反発、後に植民的経営に乗り出す満州鉄道の譲渡経過が描かれる。条約締結を終え帰国した一行を*「弔講和談判」*の幟が迎え、宮中参内に向かう馬車を*「腰抜け大使に天誅」*と暴漢が襲う。邸の玄関先に座り込み*「小村外交は5万の戦死者を裏切った」*と訴える老車夫に、勅語を受け帰宅した小村は*「南満州鉄道獲得こそ東洋平和の最大の武器」*と応える。そこへ*「桂総理が米鉄道王ハリマンと鉄道共同経営の覚書締結」*の報。*「日露間の摩擦回避のため米との協調」*を唱える桂であったが、小村の*「自国経営こそ露国対策」「満鉄なくして全亜細亜の運命なし」*との説得を承諾する（『国策』解題 p. 178／原田）。



図3 『小村壽太郎』

●日清戦争の殉難者、日露戦争の軍神

維新期の偉勲・大村、西郷、明治中・後期の外交官・小村に続いて、国策紙芝居が取り上げるのは、日清戦争で軍通訳官として殉難した鐘崎三郎、藤崎秀、山崎羔三郎、そして日露戦争の遼陽会戦で戦死した陸軍中佐・橘周太である。

鐘崎三郎：興亞の志士／平林博脚本；佐東大朗子繪畫．日本教育畫劇，1941．12．10

日清戦争時の征清殉難九烈士を題材に忠義の重要性を説いた作品。1894 年秋、遼東半島へ向かう第二軍の船上に、辮髪に支那服の出で立ちをした二人の青年、鐘崎三郎と山崎羔三郎がいる。鐘崎は、清国の兵が暴動を起こした長崎事件をきっかけに、*「日本を世界の強国にする為」*軍人になることを決意するが叶わなかった。中国語を学んだ後、威海衛、上海などで諜報活動に従事した。帰国後、日清戦争により再び密偵として清へ渡航することになった。鐘崎は、日本男子として天皇陛下のために命を捧げるのは惜しくないと語り、山崎も応える。花園口到着後、藤崎を加えた三人は諜報活動に従事するが、捕えられ、処刑された。日本軍の金州城攻略によってこの事実が明らかになり、三人を称えて「三崎山」と地名が付けられて記念碑が建てられた。三国干渉による遼東半島返還後、墓は東京・泉岳寺に移された（『国策』解題 p. 73／鈴木）。



図4 『鐘崎三郎：興亞の志士』

あゝあの赤い夕陽／平林博脚本；小谷野半二繪畫．日本教育畫劇，1941．12．16

日露戦争の戦闘が本格化した 1904 年、南満州で戦われた遼陽会戦での橘周太少佐（死後、中佐に昇進）の逸話に基づいた作品。1904 年 8 月 11 日、第二軍静岡歩兵第 34 連隊に橘少佐が着任する。着任を心待ちにしていた連隊の内田は、橘との初対面で*「銅像のようなその体格、しかもその中に充ち溢れている暖かさ、優しさ」*と感激した。着任後、同連隊は遼陽占領に際して敵兵を引きつけるため、首山堡の南側にある高地を占領する役割を担う。31 日午前、同連隊は夜襲によって高地を占領するがロシア軍の反撃で奪還され、橘も手や腕を撃たれ負傷した。内田は橘を抱えて銃弾が飛び交うなかを逃げるが敵に銃撃される。*「多くの部下を失ったことは、返すがえすも申訳なく、誠に畏多い」*と言い残して橘は亡くなった。橘は、国定教科書においても廣瀬武夫と並んで「軍神」として取り上げられた人物である。教科書においても人格高潔で優秀な軍人として描かれており、「軍神」の逸話を戦意高揚の文脈に位置付けた一般的な作品と評価できる（『国策』解題 p. 76／鈴木）。

●野口英世　1876（明治 9）年 11 月 9 日－1928（昭和 3）年 5 月 21 日

世界的な細菌学者。福島県の農家の長男として生まれ、1 歳で左手に大火傷を負ったハンディキャップを克服。高等小学校を卒業後、済生学舎（日本医科大学の前身）に学び、伝染病研究所を経て、明治 33 年渡米。44 年ロックフェラー医学研究所で主に細菌学の研究に従事。黄熱病の研究中に自身も罹患し、昭和 3 年ガーナで死去する。

野口英世：人類の恩人／木實谷喬壽原作；池田北鳥脚色；藤原成憲繪画．翼賛畫劇研究會，1941．12．31

野口英世の生涯を描いた 20 枚に及ぶ大作紙芝居。貧しい生い立ちが、幼い頃の手の火傷を克服して研究者として活躍し、黄熱病の研究のためアフリカで自らも病に斃れるまでを描く。基本的なプロットはよく知られている野口英世の伝記と大きな相違はないが、*「人類愛の為めに、闘つた科学の戦士」*のように戦時らしい表現は随所に見られる。同様に*「アメリカ人では　とても　成し遂げられない　毒蛇の研究」「野口博士が　有名になつたお陰で　アメリカの　医学界の名も、世界にやうやく、知られるやうになつた……それは直ちに、日本の勝利、でもあつた」*など、過度に野口の業績と日本人であることを結びつけ、アメリカを揶揄する内容も多い。神奈川大学所蔵本では、そのような文を読み飛ばすよう青鉛筆での指示が書き足されているほか、野口の業績に関する註記もペンで書き足されている。野口の伝記は戦前・戦後を通じて多く出版されており、このような処理により戦後も使用が可能であったと推測される（『国策』解題 p．87／小山）。



図5　『野口英世：人類の恩人』

2．登場人物「近代（明治・大正）」の特質

以上、「登場人物編」連載第 4 回として、主に明治・大正時代に生き死んでいった人物に係る作品を紹介した。この他に筆者は、紙芝居脚本に複数回出現する明治・大正期の著名な人物として明治期の元老・元勲の名前を採録しているが、いずれも作品の主人公となるには至っていない。1930〜40 年代の短期間に集中的に制作された戦時下紙芝居にとって、明治・大正期という僅か一〜二世代前の人物は、一定の評価が定まった歴史的人物と現下の熱量を帯びた同時代人との狭間にあって、“ものがたり”“伝記遺産”としての「熟れなさ」を残していたのには相違なく、作品化にも或る種の困難を伴っていたであろうことが想像されるところである。そのなかで、戦時下紙芝居にとって、上記の人物たちを登用することの“必然性”は何処にあったか、またその人物たちはどのように描かれているか。また、作品の主人公とならなかった西郷隆盛を取り上げるべきは何故か。 これらの問いを問うことによって、戦時下紙芝居の特質の一端に迫りたい。（以下の文中、年号は基本的に元号で、太陰太陽暦が使用されていた明治 5 年 12 月 2 日までの日付は旧暦で表記する。）

（1）大村益次郎：明治偉勲に事寄せる徴兵制

最初に取り上げたのは、「維新十傑」の一人・大村益次郎である。戦時下紙芝居として相次いで刊行された**『大村益次郎：國民皆兵』**1942．11．30、**『兵制の父 大村益次郎』**1942．11．30 の 2 作品は、大村が新政府に出仕し、明治 2 年 7 月兵部大輔として兵制近代化に取り組む中途、9 月 4 日京都で攘夷派浪士に襲われ負傷し、右大臣三条実美の返書を待ちながら 11 月 5 日療養中に死亡した経過を描く。

近代日本の軍隊は、維新初期の各藩勢力を統制するとともに、対外的にも国民軍の創設を必要としていた明治新政府のもとで、明治 4 年に薩摩・長州・土佐から徴集され天皇直属の御親兵を組織し、この兵力を背景にして同年 7 月廃藩置県が断行された。大村暗殺の後は山縣有朋がその地位を承継、明治 5 年 2 月 27 日兵部省は陸軍省・海軍省に分割され、山縣は陸軍大輔となった。3 月 9 日には山縣の上奏により御親兵が廃止されて近衛が設置され、山縣は近衛都督・陸軍中将にも任じられた。また 3 月には鎮台制度が開始されている。新旧暦切替 4 日前の明治 5 年 11 月 28 日には「徴兵告諭」の通牒があり、明治 6 年 1 月 10 日に国民の義務として国民皆兵を目指す「徴兵令」が陸軍省により発布された。同年 4 月には東京鎮台に初の徴兵による兵卒が入営し、続けて明治 7 年陸軍士官学校・明治 9 年海軍兵学校など軍人養成機関の整備をとおして、建軍の基礎が形成されていくのである。

この軍隊創成期に、兵部省兵部大輔・大村が、士族による軍制から徴兵制度による国民兵制への移行を提唱したことから、帝国陸軍建設の中心人物と評される。大村を主人公とする二つの紙芝居で、*「大村益次郎は兵制改革の尊い人柱となって斃れた」*（**『大村益次郎：國民皆兵』**）、*「兵制いまや七十年、大東亜戦争の輝かしい大戦果！　大御稜威のもと皇軍の威武は全世界を驚倒し、国民皆兵一億一心の備えはいよいよ固い。九段の社頭に立つ先覚者**大村益次郎**先生は、この大東亜戦争の完遂をぢっとみまもって居られるのです」*（**『兵制の父 大村益次郎』**）と描かれる。また、**『大村益次郎：國民皆兵』**の脚色者・鈴木景山は*「作品を貫く一筋の金線としたのはいうまでもなく『国民皆兵』を主張して我が生命をも省みなかった**大村益次郎**の忠誠である。そしてこの感動を伝えて一億の国民に『我等みな兵なり』の信念を益々堅固ならしめんと欲するのが脚色者の意図である」*と解説している。このように極めて明確な製作意図のもとに大村

を描出したこの２作品が、いずれも「1942 年 11 月 30 日」の刊行日付を有することは単なる偶然ではない。大村の国民兵制提唱に応えた徴兵制の予告書「徴兵告諭」が政府から示された明治５年 11 月 28 日の 70 周年を期して、そしてまた大東亜戦争開戦からまる一年を迎えようとする（そして緒戦の勝利の興奮が過ぎようとした）この時期に、日本陸軍の基礎をつくった大村を主人公とすることにより、徴兵制の意義を再確認し、皇軍と国民の一体性を訴える意図のもとに創作されたものであったことは明らかである[注2]。

一方、徴兵令は、それまで軍事に関する権益を独占していた武士（士族）の特権を奪うものと認識され、士族反乱の原因の一つとなった。徴兵令の対象となった平民からも不満が出て、一部では血税一揆などの騒動に発展した。明治２年９月不平武士による大村襲撃から明治６年１月征韓論による西郷隆盛下野への４年は、維新期軍制を巡る一繋がりの道のりであった。大村益次郎はいずれ西南に第二の足利尊氏が起つとの予言を残したといわれている。大村と西郷は、戦時下紙芝居において対比的な登場をしており、その対比性の分析は本稿の課題でもある。

(2) 西郷隆盛：人物描写の両義性

西郷隆盛は、大久保利通・木戸孝允と並ぶ維新三傑のなかでも群を抜く国民的人気を誇る人物であり、その東洋豪傑風人格への思慕・畏敬を交えて「大西郷」とも呼ばれる。我が国の歴史的人物のなかで、固有名に「大(The Great)」が冠されることがあるのは、後醍醐天皇に仕えた「大楠公（楠木正成)」と明治維新の功労者・西郷の二人を数えるのみであろう。しかしながら、第二次大戦下に国民精神統合メディアの役割を担った国策紙芝居のなかに、西郷を主人公とする独立作品は、上述のように一つも存在しないのである。それは何故だろうか。このことは、大政奉還の 10 年後に、明治天皇(実体は岩倉・大久保の維新政府）から「鹿児島県暴徒」に対する「征討」の勅命が下され、８ヵ月に及ぶ戦いの末に全的滅亡に至った士族反乱と、その精神的支柱となっていた西郷の歴史的評価に関わる事柄と考えられる。西南戦争を舞台にした紙芝居作品として（やはり西郷を主人公としたものではないが)、**谷干城夫人／堀尾勉脚本；西正世志繪畫．日本教育畫劇，1942．12．15、大空に描く／北島英作脚本；西正世志繪畫．日本教育畫劇，1943．06．10** の二つが残されている。

●西郷の下野と士族反乱

大政奉還後の日朝関係正常化を巡る明治政府内の外交使節派遣論争に敗れ、明治６年 10 月、板垣退助・江藤新平・後藤象二郎・副島種臣らとともに下野した西郷は、陸軍大将の肩書を持ったまま鹿児島の地で田夫野人風の隠棲生活を営んでいるかに見えたとされる。しかし、西郷に続いて官職を辞した西郷派の軍人・文官は約 600 人ともいわれ、翌７年６月に西郷が鹿児島士族教育のために設立した私学校では、学課のほか軍事（銃隊・砲術）教育が行われ、さらに開拓農業も営まれていた。私学校は、県令大山綱良の協力・支援も得て、政治結社の性格を持った士族組織とも、西郷王国ともいうべき趣を呈していた。

一方の維新政府は、台湾出兵（明治７年４月)、樺太千島交換条約（明治８年５月)、江華島条約（明治８年９月）によって懸案の外交課題を凌ぐとともに、廃刀令(明治９年３月)、金禄公債証書発行条例（明治９年８月）を交付して、近代国家として国民皆兵・巡査制度・地租改正の完成を急いだ。このような政府の外交政策と近代化政策の強行に不満を抱く士族たちは、佐賀の乱(明治７年２月１日）を皮切りに、神風連の乱（明治９年 10 月 24 日)、秋月の乱（同 10 月 27 日)、萩の乱(同 10 月 28 日）と反乱を起こすが、政府軍の武力の前に短期日のうちに制圧され、首謀者は自害または速簡裁判のうえ斬刑に処せられた。

西郷は、一連の士族反乱に深甚な関心を寄せながら「出兵の大義なし」と静観する。しかし政府側は、西南の地において絶大な求心力を持つ西郷に疑心を抱き、たびたび密偵を派遣して独立国薩摩の動向を探らせていた。紙芝居『**大空に描く**』では、「気球」の開発資金を熊本鎮台出入りの叔父に頼みに行った発明家の息子が、八代周辺で偶然出会った人物に「*小父さんは**西郷方**の人と違う？*」と尋ね、事情を話すと熊本鎮台の谷干城を紹介してもらうことになる。その谷から「***西郷隆盛門下**の私学校生徒等が戦ひを起こすという噂があるので、かねてより黒田閣下が、九州一帯をひそかに調べて歩かれるという話だった*」と打ち明けられ、その人物が「*千金丹売り*」に変装した黒田清隆（後の第２代内閣総理大臣）であったことが分かる（『国策』解題 p. 162／原田)。本作品では、気球の開発にその後一年を要し、熊本城の籠城軍に援軍が近いことを知らせる役割を果たすという筋立てゆえ、黒田が九州西南一帯を探っていたのは士族反乱が頂点に達していた明治９年ということになる。



図6 『大空に描く』

●**西郷軍の鹿児島進発**

維新後の官営兵器廠は大阪に置かれており、廃藩置県によって政府所轄となっていた薩摩藩の兵器弾薬を大阪に移す場合は、県庁に事前届出を行うことになっていた。ところが明治 10 年 1 月になり、それが夜間に突然行われたことに私学校の生徒たちが激昂し、1 月 29 日陸軍省火薬庫を襲撃、31 日海軍造船所の火薬庫から小銃・弾薬を略奪、この襲撃は 2 月 2 日まで続けられる。2 月 3 日には政府（大警視川路利良）が鹿児島に遣わした密偵が私学校生徒に捕らえられ、西郷「刺殺」の命を自白した。このことが明治政府による西郷暗殺計画の強力な証拠とされ、私学校の生徒を中心に武力蹶起は止め難い勢いとなった。大隅半島に滞在していた西郷は末弟の小兵衛から火薬庫襲撃を聞き、「しまった」「我が事已む」と嘆息し、挙兵已む無しとなった幹部会議の席上にて「俺（おい）の体は差し上げもそ」と発したといわれる。

西郷は軍を率いて東上するにあたり、「今般政府へ尋問の廉有之」から始まる上京通知書を 2 月 12 日県令大山綱良に提出し、14 日から 17 日にかけて 7 大隊・約 13000 人が鹿児島城下を後にした。馬上の西郷は陸軍大将の正装であったといわれる。紙芝居『**谷干城夫人**』はその模様を次のように描く―*「明治十年二月、五十年振という大雪が九州全土を荒れ狂い、人々の胸は不吉な予感に戦く時、あたかもこの時とばかりに、**薩摩の西郷さん**が、時の明治政府糾弾の兵を挙げました」「足をとらえ腰を埋める雪の山野を、薩摩隼人の名に羞じぬ**西郷勢**三千四百は、吾に邪魔するものあらば一撃の下に打倒さん勢いで、一気に熊本城をさしてかけのぼる」*。本作品は、吉川英治『日本名婦伝』（全国書房、1942. 1. 20）所収「谷干城夫人」の紙芝居版ともいうべき筋立て（総勢 3400 人も吉川に同じ）である。しかし、士族反乱を間近に見てきた人々の*「不吉な予感」*を 50 年振りの雪嵐に象徴させ、*「薩摩の**西郷さん**」「薩摩隼人の名に羞じぬ**西郷勢**」*の名辞には、地元民衆の西郷への信頼・親近感を重ねるとともに、いわゆる反乱軍（薩賊！）の定義に対して一定の留保を置く（「*明治政府糾弾の兵*」と書く）作者のスタンスが垣間見える。



図7 『谷干城夫人』

●**政府軍の熊本城籠城**

明治 10 年 1 月 28 日明治天皇（当時 26 歳）は、父・孝明天皇の十年式年祭のために京都入りし、2 月 14 日帰京と定められていた。しかし、その翌日以降に鹿児島で私学校生徒による火薬庫襲撃が連続し、西南の地の切迫が告げられた。内乱時に大臣が東西に分かれることを案じた政府は、東京にいた大久保利通の西下とともに、京都御所を仮太政官として天皇親征の形を整えた。熊本鎮台司令部には陸軍卿山縣有朋から事態切迫の通報があり、熊本城の戦略的重要性（熊本城の存亡が九州一円の人心に与える影響の大きさ）から、2 月 14 日の作戦会議で鎮台司令部は籠城策を決定した。鎮台司令長官は谷干城、参謀長樺山資紀中佐、参謀副長に児玉源太郎少佐、川上操六少佐という布陣である。2 月 19 日明治政府は「鹿児島賊徒征討」の詔書を発令―有栖川宮を征討総督とし、陸軍卿山縣有朋・海軍大輔川村純義を参軍（総司令官）に任命し、各鎮台に動員令を下した。この征討令の発令によって、鎮台兵は「官軍」に、西郷軍は「賊軍」になり、戊辰戦争の立場は完全に逆転することになった。西郷軍の城下到達は 2 月 20 日とされる。熊本城下で最初の戦火が切られた 5 日後の 2 月 25 日には、陸軍大将正三位西郷隆盛、陸軍少将正五位桐野利秋、陸軍少将正五位篠原国幹の官位が褫奪された。明治 6 年の下野にさいして西郷の「参議」と「近衛都督」の辞職が認められ、西郷に続いた桐野利秋（陸軍裁判所長）、篠原国幹（近衛司令長官）らの武官は除隊に、村田新八（宮内大丞）、池上四郎（外務省出仕）らの文官は免職の扱いとされていた。しかし、士族に大きな人望を持つ西郷が「陸軍大将」の地位を去ることはいわば“虎を野に放つ”に等しく、明治政府は西郷をその地位に繋ぎとめておかなければならなかったのである（桶谷秀昭『草花の匂ふ国家』文藝春秋 1999. 6、p. 192）。しかし今や、桐野・篠原・村田の官位を含む「寛典の措置」も解かれ、西郷軍は名実ともに“薩賊”となった。

紙芝居『**谷干城夫人**』は、「西郷蹶起」から「熊本城炎上」「政府背面軍との開通」までの約 2 ヵ月を描く。そのなか共に熊本城に籠城した谷司令長官夫人の谷玖満子や士官の夫人たちが、弾丸飛び交う野原で野草を摘んで食糧を確保。その行動は、政府軍の農民や町人出身の兵士たちの士気を鼓舞し、戦いに勝利することができた（『国策』解題 p. 143／新垣）。作品では、これに力を得た城内の空気を背に、児玉源太郎参謀と谷干城司令長官が*「百姓町人の兵隊だと薩摩の奴らは馬鹿にしていて。どうです！　何年かかる心意（つもり）か知らんが、**西郷先生**もあて外れでしょう」「**西郷さん**も気の毒だ。なあ児玉君」*と語らう場面が続く。実戦経験の浅い籠城軍の徴募兵は、士族で固められた屈強の西郷軍からその武力を侮られ、熊本民衆からも“くそちん（糞鎮）”と馬

鹿にされていたという。しかし、谷・児玉の２人にまだ確実な勝利の姿は見えていないのであり、この西郷への敬称に揶揄のニュアンスはなく、陸軍組織上職に対する自然な呼び名であったとみるべきであろう。

本作品には、熊本城攻防戦に伝えられる史話として逸し得ない人物も取捨されている。

与倉鶴子：熊本城攻防の緒戦を指揮した与倉知実中佐（熊本歩兵第 13 連隊長。薩摩藩）の夫人。鶴子は臨月に近い身で籠城に加わり、やがて男児を出産するが、（作中）産後病床を隔てる中庭向こう側の灯影に浮かぶ複数の人影から、軍務にあった夫の戦死を知る。*「いまはのきはの『日本帝国、……ばんざい』の悲痛な声と無心に泣きだす嬰児の声が遠く打ち交す」*とその瞬間が描かれている。与倉中佐の戦死は、攻防戦が開始されたばかりの２月 23 日といわれる。産後も士官の夫人たちと気丈に働く姿には、戦線で戦う夫を支える「戦時下銃後の女性たち」というテーマが込められているであろう。



図8 『谷干城夫人』

谷村計介：日向国諸県郡（宮崎）郷士の子息。熊本鎮台一等卒として佐賀の乱に出征、単身先行し渡船を調達して窮地の部隊を救った功績が認められ陸軍伍長に昇進。この戦功から乃木希典連隊長の推薦で明治９年 12 月熊本歩兵第 13 連隊に転属。薩摩軍に包囲された熊本城の苦境を第１旅団本部（高瀬）に知らせるため、煤を全身に塗り込み継ぎ接ぎだらけの百姓姿に変装して出城。途中西郷軍の捕縛を爪で切り解き脱走して３月２日伝令の使命を果たす。その２日後最初の戦闘が始まった日田原坂の戦いで戦死した。谷村の忠君愛国の功績は第一期国定教科書「修身」に掲載され、尋常小学校３年の唱歌（明治 38 年）まで創られた。吉川英治「谷干城夫人」には本逸話があるが、紙芝居では割愛されている。

山川浩：西郷軍の包囲を受けて２ヵ月に及ぶ籠城戦を戦っていた熊本城守備軍にとって、背面からの救援・開通は必至の戦略であった。そこへ４月 14 日八代方面から選抜隊を率いた山川浩中佐が戦火のなかを熊本城へ入城し、黒田率いる救援隊の先陣となった。紙芝居『**谷干城夫人**』の末尾近く、伝令が*「援軍が見えました。川尻（筆者注：八代北）方面からまっしぐらにかけてきます。**山川中佐**の旅団兵らしく見えます」*と谷司令長官に伝える場面として描かれている。山川は会津藩士。戊辰戦争での活躍を知る谷干城の推薦により明治６年陸軍に八等出仕。同年陸軍少佐として熊本鎮台に移り、明治 10 年西南戦争に陸軍中佐・征討軍団参謀として出征していた。弟に山川健次郎（東京帝国大学総長も務めた物理学者）、妹に大山捨松（12 歳で岩倉使節団に随行、陸軍大将大山巌の後妻となり鹿鳴館の華として活躍）がある[注3]。

『**大空に描く**』『**谷干城夫人**』のような戦時下紙芝居に、西南戦争の勝利で名声を得た鎮台司令長官の谷干城を思い起こさせる創作意図は薄かったであろう。むしろこの２作品がもっぱら西南戦争における熊本城籠城戦を取り上げていることには、太平洋戦争末期の本土決戦（島国日本の徹底抗戦）を重ね合わせている趣きがある。前述した「籠城戦下の女性の活躍」「気球の兵器応用、ナイーブな科学賞揚」が見られるのもその一端である。しかし戦時下紙芝居には、西南戦争の帰趨を描いたものは存在せず、そのこと自体に戦時下メディアとしての限界が示されている。上述「1. 登場人物と作品」で紹介した『**臣民の道**』『**學の泉：教育勅語解説**』『**物語愛國百人一首**』などと同様、戦時下紙芝居がパターナイズされた西郷隆盛をただ点描的にしか描き得なかったことには、我が国近代史上における西郷の位置付けに対する抑制（あるいは何がしかの禁忌）の継続的な所在をこそ指摘すべきであると考えられる。

●戦役の帰趨、西郷の敗死

神戸から博多・長崎を経て熊本城を目指した政府正面軍と、熊本城を落とせぬまま豊前街道（山鹿・植木）を選んだ西郷軍との激戦（田原坂の戦い３月２日～23 日）。八代からの政府背面軍による熊本城開通（４月 14 日）。側面を衝かれる形となった西郷軍は熊本城の包囲を解いて山間の人吉へ退却（４月 22 日）。西南戦争の大勢はこの４月下旬には決していたといわれる。豊後への一部進出、出水・八代奪回の戦いも大勢を挽回できず人吉を去って宮崎へ転戦（５月 29 日）。しかし征討軍の追撃を受けて宮崎の海岸線を北上し日向・美々津さらに延岡の山僻地に追い込まれる（6～7 月）。８月 17 日西郷は解軍指令を出したのち延岡西方の可愛岳を脱出、険しい日向山岳部を南下して９月１日鹿児島へ戻って政府軍と最期的対峙となる。西郷の軍勢は出立時の私学校 13000 人、その後の徴募兵に、近県から参加した党薩隊を合わせて約 30000 人を数えたが、人吉で多く（4000 人といわれる）が投降、延岡脱出時には 500 人となり、鹿児島にたどりついたのは 370 人余であったとされる。対する山縣有朋の政府軍（最高 60000 人）が包囲する９月 24 日城山の戦いは文字通りの殲滅戦となった。８ヵ月に及ぶこの戦いのなかで、様々な理想を

抱いて戦いに赴いた多くの若者が命を散らした。彼らは、戊辰戦争をともに戦った戦友であり、あるいは維新後の社会的階梯を異にした竹馬の友であり、恩愛の絆浅からぬ師弟関係の袂を別った者たち、さらには血を分けた親兄弟・親族でさえあった。

明治 10 年 10 月 10 日有栖川宮熾仁親王、山縣・川村両参軍ら征討軍は東京に凱旋した。この時、上野公園では第 1 回内国勧業博覧会が開催されていた（明治 10 年 8 月 21 日開場・11 月 30 日閉場）。これは内務卿大久保利通が推進しようとした殖産興業の象徴であり、西郷軍に対する将に勝利宣言というべきイベントでもあった。2 月に始まった西南戦争は、戊辰戦争の 8200 人を超える死者を生み出して終わった。戦いの終盤には、戦死を免れた西郷軍・党薩軍から多数の投降者も生まれ、人的・物的被害の補償を含む戦後処理が明治政府の大きな仕事として残された。国事犯事件の審理は特別裁判所によって処断するという明治政府の原則に基づき、長崎臨時裁判所の国事犯徒は、斬罪 22 人をはじめ懲役・除族・贖罪収贖・棒鎖など合わせて 2664 人に達した。

●戦後処理、明治憲法、西郷の名誉回復

西南の地で打たれた士族反乱への終止符は、ただちに明治政府の安定を意味しなかった。明治 7 年 1 月「民撰議院設立建白書」に始まる自由民権運動の高揚は反藩閥政府運動の先駆的象徴であり、「明治 14 年政変」、明治 14 年 10 月 12 日明治天皇による「国会開設の詔」を転換点として、明治 18 年 12 月 22 日太政官制度に代わる「内閣制度」、明治 21 年 4 月 30 日枢密院の創設を経て、ようやく、明治 22 年 2 月 11 日「明治憲法」の公布、明治 23 年 11 月 29 日施行へと至る。

明治 22 年の憲法発布を頂点とする祝祭のなかで、維新以来の幕府軍対官軍、政府軍対不平士族の対立に加えて、藩閥政府対在野民権派という政治的対立を清算することが残された課題となっていた。明治 21 年 10 月「宮城」と改称された江戸城に、明治天皇が（二度目の）入城をする姿を東京市民は祝賀一色で歓迎した。また憲法発布式が行われた建国記念日の翌日に行われた上野公園（明治 10 年第 1 回内国勧業博覧会が行われた地）への行幸は、上野戦争に対する市民感情を中和する効果大であった。いうまでもなくメインは、新しい宮殿（皇居明治宮殿）で陸軍正装の明治天皇が内閣総理大臣黒田清隆（紙芝居『**大空に描く**』に千金丹売りとして登場）に与えた憲法発布式である。東京府主催による皇居前祝賀会には約 10 万人が参集したといわれる。それとともに政府は、憲法発布に合わせて大規模な国事犯（政治犯）の大赦を発令し、福島事件・大阪事件・保安条例違反などで逮捕されていた民権運動家を自由の身とした。この大赦令によって、西郷隆盛もまた賊名を解かれ正従三位が贈位、公的復権を果たすこととなる。西郷に対して「大政復古の大功臣」という再評価を行うことによって、士族反乱の英雄を明治憲法発布後の公的秩序のフレームに回収したのである。明治 10 年 2 月西郷軍が掲げた出兵の趣意書「政府へ尋問の廉有此」は、この大赦の沙汰によって未完の問いのままに封じられることとなった。西南戦争の 21 年後となる明治 31 年 12 月 18 日には、天皇の行幸によって清祓された上野公園で西郷銅像（高村光雲作）の除幕式が行われ、その姿は関東大震災・東京大空襲といった受難の時を乗り越え、東京のシンボル的光景として現在に至っている。



図9 『臣民の道』

●遺された西郷評価の二重性

憲法発布に伴う西郷の名誉回復―それは当時の明治政府にとっても、依然として根強い国民的人気と信頼が寄せられていた西郷を「国民統合」のシンボルと位置付ける一大象徴操作の試みであった。その効果でもあろう、西郷の賊名が解かれるとともに、西郷の威徳を讃える様々な書物も相次いで出版されるようになった。そして、上野公園の銅像除幕から 2 年後の明治 33 年には『尋常国語読本』（金港堂書店）に西郷像の話が掲載されるようになる[注4]。しかし、「朝憲を紊す逆賊」から一転、不世出の「英雄（エイユー）」として西郷を讃える明治政府（これに追随した新聞等の論調もまた）が示した手の平を返す如き二重規範は、西郷の歴史的評価に分裂や二重性をもたらすことにつながった。例えばそれは、早くも国定教科書自身のなかに気付かれないかのような矛盾として並置されている。明治 44 年第二期『尋常小学修身書』巻四では、（紙芝居作品『**谷干城夫人**』の項で紹介したように）熊本城籠城の苦境を征討軍に伝令した谷村計介伍長を「忠君愛国」の教材として取り上げながら、同じく巻五ではその「忠君愛国」秩序当体への反乱者（！）でなければならぬ西郷を「人間の度量」の例話として取り上げるが如きである。

明治憲法発布後の西郷に対する評価は分裂せられたままである。征韓論による政府内の決裂、西郷・江藤・板垣らの下野に引き続いた士族反乱、その最大のものとしての西南戦争は維新後の封建反動の頂点であり、これを率いた西郷を日本の大陸侵略思想の源流と位置付ける戦

後歴史学、また外国の歴史学者による研究潮流があった。たしかに、頭山満の「玄洋社」（明治 14 年 2 月創立といわれる）を代表として、荒尾精「日清貿易研究所」（明治 23 年創立。後の「東亜同文書院」）、内田良平「黒龍会」（明治 34 年 1 月創立）といった国粋団体が、日清・日露さらに日中戦争下で「極右的な防諜論者」（E. H. ノーマン『日本における近代国家の成立』）の、あるいは大陸浪人の供給源となってきた。こうした歴史のなかから、我が国の近代化・欧化コースに対する封建的反動者という一つの位置付けが西郷に付きまとうことになってきた。その一方で、内村鑑三、福沢諭吉らによる特異な人物評価があり、さらに国家社会主義者北一輝による「維新革命の体現者」（あるいは永久革命者）（『支那革命外史』序）という思想的評価が競合する。また、累次の「国定教科書」に描かれる西郷イメージの拡大・定着も無視できない。歴史の教科書では勝海舟・西郷会談の挿絵 1 枚が掲載され江戸城無血開城の簡単な説明が添えられているだろう。国語読本は猟犬を伴った脇差・着流しの銅像に陸軍大将・不世出の英雄を重ね、教科修身は高潔な度量を持った模範的人格者として西郷を描いてきたであろう。そして、本稿の主対象である数点の戦時下紙芝居に見られる西郷像もまた、日中戦争・太平洋戦争に至る時期に制作されながら（アジア主義の思想的源流としてでさえなく）、これら国定教科書が提示してきた西郷像を決して超えないこと、否むしろ上書き的にトレースすることを創作上の格率としたかのような作品に覆われている。これら国定教科書や戦時下紙芝居でピン止めにされた静的な西郷像は、教科書の読者・紙芝居の観客であった次世代の日本国民に、或る種心情の分裂をもたらし、その結果としての重大な思考停止を強制してきたと言わねばならない。明治政府の大赦に象徴される西郷評価のダブルスタンダードこそが、現在に至るまで続く西郷隆盛という存在に対する評価の“難しさ”の根幹を成している。そこには、評価の論争性を疎外する象徴的権威の偏在が深く関わっているであろう。

本稿の前半に取り上げた徴兵制の祖・大村益次郎は、維新期の殉死者として靖国神社に合祀され、明治 26 年 2 月に日本初の本格的西洋式銅像が靖国神社の入口に建立されている。皇居外苑に立つ楠公像（明治 33 年高村光雲作）とともに、歴史上の忠節の士を可視化した周囲を圧する厳めしい姿は、首都の観光スポットとなってきた。しかし日本国民は、“賊軍の将”の汚名ゆえに靖国神社に合祀されていない西郷隆盛に会うために上野公園に通い続けてきたであろう。その心情の謎はどこにあるのだろうか。作家の三島由紀夫は「銅像との対話―西郷隆盛」なる一文を残している―「西郷さん／……実は私は最近まで、あなたがなぜそんなに人気があり、なぜそんなに偉いのか、よくわからなかったのです。……しかし、あなたの心の美しさが、夜明けの光のように、私の中ではっきりしてくる時が来ました。時代といふよりも、年齢のせゐかもしれません。とはいへそれは、日本人の中にひそむもっとも危険な要素と結びついた美しさです。……／あなたは涙を知っており、力を知っており、力の空しさを知っており、理想の脆さを知ってゐました。それから、責任とは何か、人の信にこたへるとは何か、といふことを知ってゐました。知ってゐて行ひました。／この銅像の持ってゐる或るユーモラスなものは、あなたの悲劇の巨大を逆に証明するやうな気がします」（『決定版三島由紀夫全集』第 4 巻、新潮社、2003. 9、pp. 665～667）と。ここに西郷の「志」、「心の美しさ」といわれるものは、国定教科書が創作した国民統合の象徴として脱色された「人格」像を踏み破るものである。それは「日本人の中にひそむもっとも危険な要素と結びついた」ものであり、「悲劇の巨大を逆に証明するやうな」何ものかであるとされる。三島がこの一文を掲載した（1968 年 4 月 23 日「産経新聞（夕刊）」）一年半後に自決に及んだこと―50 年後の現在も論議を呼び起こすその企図は、上野公園銅像の黒い巨眼が見つめ続けている維新政府ひいては日本近代の暗部と密かに交差していると考えられる。（続）

注 1．日本教育紙芝居協会の設立にも関わった主要な人物の生没年は下記のとおりである。
青江舜二郎：1904 年 11 月 26 日－1983 年 4 月 30 日
松永　健哉：1907 年 8 月 16 日－1996 年 2 月 19 日
鈴木　紀子：1909 年 5 月 22 日－1984 年 5 月 8 日
堀尾　青史：1914 年 3 月 22 日－1991 年 11 月 6 日
稲庭　桂子：1916 年 12 月 18 日－1975 年 10 月 24 日

注 2．雑誌『紙芝居』5 巻 12 号「絵本か紙芝居か（ぬきながら生）」の記事は、兵制七十周年記念行事として大政翼賛会（翼賛紙芝居研究会）製作の紙芝居『兵制の祖 大村益次郎』〔ママ〕がその記念の日にあたる 11 月 28 日東京市中各所で実演されたことを紹介している。同時に、「ところが果して出来たところの紙芝居大村益次郎は如何。一目見て驚いた。これはただバラバラにした絵本である。もはや、この世界において千里も先に進んだ言葉を持つわれわれとしてこういう作品を評するのも退屈な話であるが（中略）このまま放任していてよいものかどうか。やはり、どうにかせねばなるまい」と酷評している（1942. 12. 10、p. 44）。堀尾青史と推測される評者「ぬきながら生」は、歴史的人物に対する時代評価と紙芝居作品に対する本質的評価との違いを厳しく打ち出している。「この世界において千里も先に進んだ言葉」には、日本教育紙芝居協会の設立後、一貫して紙芝居創作の刷新に取り組んできた実績と自負が滲んでいる。

注 3．西南戦争で薩摩軍と戦い武勲をあげた山川浩は、西南戦争後に勃発した近衛兵による「竹橋事件」反乱兵の死刑執行官に陸軍卿山縣有朋から指名された。会津戦争の敗北から明治政府に出仕していく山川一族は幕末維新の時代に生きた人々の運命の複雑さを象徴している。

注 4．明治 33 年『尋常国語読本』では西郷隆盛を次のように描いている―「コノ大キイ人ハサイゴータカモリトイフ人デアリマス。タカモリノツレテヰル犬ハ、ケモノヲカルトキニ、ツカフ犬デアリマス。タカモリハ、リクグンノタイショーデ、ヨニメヅラシイエイユーデゴザイマシタ」。

【参考文献】

本稿執筆に当たり、主に下記の文献を参考にしたが、直接引用を除き掲載ページは省略した。

石牟礼道子『西南役伝説』（講談社文芸文庫 2018.3）、江藤淳『完本南洲残影』（文春学藝ライブラリー、2016.6）、小川原正道『西南戦争』（中公新書、2017. 12）、桶谷秀昭『草花の匂ふ国家』（文藝春秋、1999. 6）、尾崎士郎『私学校蜂起』（河出文庫、1989. 11）、河原宏『西郷伝説』（講談社現代新書、1971. 9）、先崎彰容『未完の西郷隆盛』（新潮選書、2017. 12）、橋川文三『西郷隆盛紀行』（文春学藝ライブラリー、2014. 10）、橋本昌樹『田原坂』（中公文庫、1976. 5）、坂野潤治『西郷隆盛と明治維新』（講談社現代新書、2013. 4）